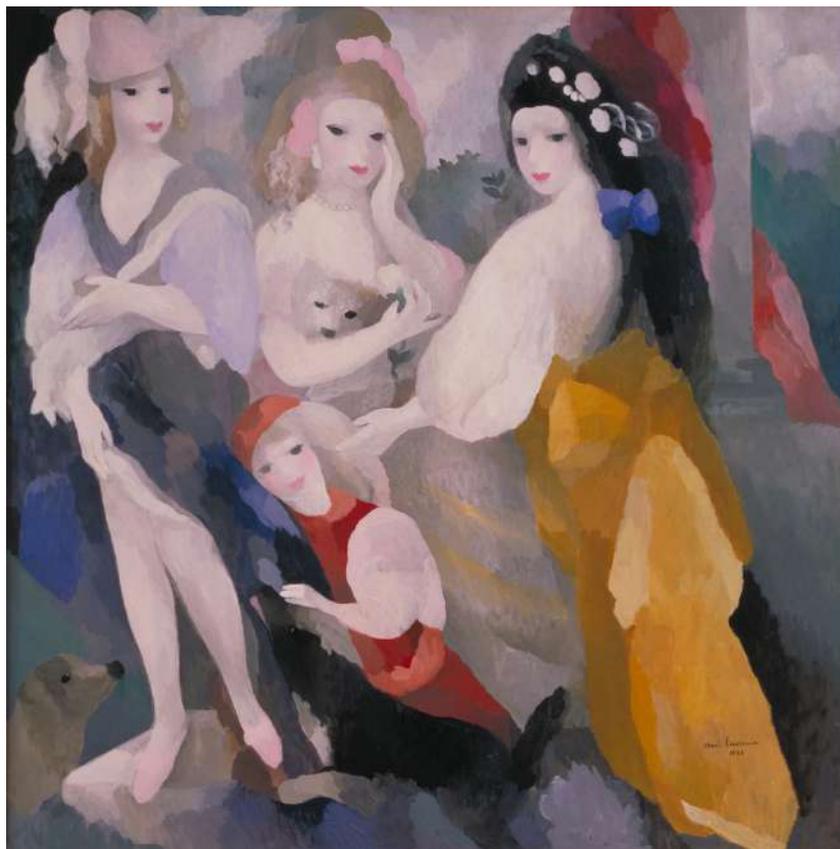


報道各位

2023年8月23日
公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館

マリー・ローランサン ー時代をうつす眼

2023年12月9日 [土] - 2024年3月3日 [日]



マリー・ローランサン《プリンセス達》1928年、大阪中之島美術館

公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館（館長 石橋 寛）は、「マリー・ローランサン ー時代をうつす眼」展を開催します。

マリー・ローランサン（1883-1956）は、20世紀前半に活躍した女性画家です。キュビズムの画家として紹介されることも多くありますが、「前衛的な芸術運動」や「流派（イズム）」を中心に語る美術史の中にうまく収まらない存在です。ローランサン自身は、自分に影響を与えた存在として、同時代の画家マティス、ドラン、ピカソ、ブラックの名前を挙げていますが、彼らの様式を模倣することなく、パステルカラーの独自の画風を生み出しました。彼女は同時代の状況を見つつ、時代の要請を理解して、自らの方向性を模索しました。

本展では石橋財団コレクションや国内外の美術館から、ローランサンの作品約40点、挿絵本等の資料約25点に加えて、ローランサンと同時代に活躍した画家たちの作品約25点、合計約90点を展示します。ローランサンの画業を複数のテーマから紹介し、関連する他の画家たちの作品と比較しつつ、彼女の作品の魅力をご紹介します。

マリー・ローランサン



《三人の若い女》を制作中のマリー・ローランサンの1953年頃の写真、マリー・ローランサン美術館

マリー・ローランサン（1883-1956）は、パリのアカデミー・アンペールで学び、キュビズムの画家として活動をはじめました。1914年にドイツ人男爵と結婚、ドイツ国籍となったため、第一次世界大戦がはじまるとフランス国外への亡命を余儀なくされました。1920年に離婚を決意して、パリに戻ってくると、1921年の個展で成功を収めます。第二次世界大戦勃発後もほとんどパリに暮らし、1956年に72歳で亡くなるまで制作をつづけました。

【見どころ】

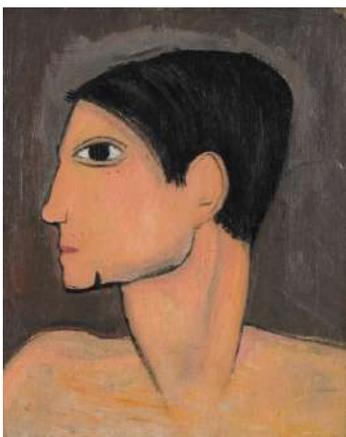
1) ローランサンの活動を多角的に紹介。



ローランサンは画家や彫刻家だけではなく、文筆家や詩人とも親しく、自作詩も発表していました。さらにはバレエの舞台装置や舞台衣裳のデザインも手がけるなど、幅広い活動をおこなっていました。本展覧会では、キュビズムの画家として活動していた初期から最晩年の大作《三人の若い女》に至るまで、ローランサンの幅広い活動を紹介します。

マリー・ローランサン《三人の若い女》1953年頃、マリー・ローランサン美術館

2) ローランサンと、同時代の芸術家との競演。



ローランサンは、同時代の芸術家との交流を持ちながら、画家として活動していました。画業を始めた初期に出会ったジョルジュ・ブラックやパブロ・ピカソをはじめ、藤田嗣治など、同時期にパリで活躍していた画家たちの作品を合わせて紹介します。同時代の画家たちの作品と比べてみることで、ローランサンの作品の特徴をよりよく知ることができるでしょう。

マリー・ローランサン《パブロ・ピカソ》1908年頃、マリー・ローランサン美術館

3) 国内外の作品が一堂に。

当館所蔵作品 35 点に加えて、マリー・ローランサン美術館をはじめとする国内 14 箇所の美術館が所蔵する作品約 50 点、国外 4 箇所の美術館が所蔵する作品 4 点の合計約 90 点を展示します。

【展覧会構成】

- 序章：マリー・ローランサンと出会う
- 第1章：マリー・ローランサンとキュビズム
- 第2章：マリー・ローランサンと文学
- 第3章：マリー・ローランサンと人物画
- 第4章：マリー・ローランサンと舞台芸術
- 第5章：マリー・ローランサンと静物画
- 終章：マリー・ローランサンと芸術

【主な出品作品】

1



2



3



4



5



6



7



8



- 1) マリー・ローランサン 《帽子をかぶった自画像》1927年頃、マリー・ローランサン美術館
- 2) マリー・ローランサン 《シェシア帽を被った女》1938年、ヤマザキマザック美術館
- 3) マリー・ローランサン 《手鏡を持つ女》1937年頃、石橋財団アーティゾン美術館
- 4) マリー・ローランサン 《二人の少女》1923年、石橋財団アーティゾン美術館
- 5) マリー・ローランサン 《花を生けた花瓶》1939年、マリー・ローランサン美術館
- 6) マリー・ローランサン 《椿姫 第3回》1936年、マリー・ローランサン美術館
- 7) マリー・ローランサン 《椿姫 第7回》1936年、マリー・ローランサン美術館
- 8) マリー・ローランサン 《椿姫 第9回》1936年、マリー・ローランサン美術館

【開催概要】

展覧会名： マリー・ローランサン 一時代をうつす眼
 主催： 公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館
 後援： 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本
 会場： アーティゾン美術館 6階展示室
 会期： 2023年12月9日〔土〕－2024年3月3日〔日〕
 開館時間： 10:00－18:00（2月23日を除く金曜日は20:00まで）＊入館は閉館の30分前まで
 休館日： 月曜日（1月8日、2月12日は開館）、12月28日－1月3日、1月9日、2月13日
 入館料（税込）： 日時指定予約制（2023年10月10日〔火〕よりウェブ予約開始）
 ウェブ予約チケット1,800円、窓口販売チケット2,000円、学生無料（要ウェブ予約）
 ＊予約枠に空きがあれば、美術館窓口でもチケットをご購入いただけます。
 ＊中学生以下の方はウェブ予約不要です。
 ＊この料金で同時開催の展覧会を全てご覧頂けます。

担当学芸員： 賀川恭子、内海潤也

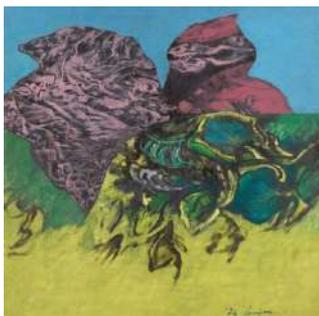
【同時開催】

石橋財団コレクション選

石橋財団は、19世紀後半の印象派から20世紀の西洋近代絵画、明治以降の日本の近代絵画、第二次世界大戦後の抽象絵画、日本および東洋の近世・近代美術、ギリシア・ローマの美術など現在約3,000点の作品を収蔵しています。5階、4階ではこれらコレクションの中から選りすぐりの作品をご紹介します。

石橋財団コレクション選 特集コーナー展示

野見山暁治（4階展示室）



野見山暁治（1920-2023）は、長い画業のなかで具象と抽象のあいだを漂う独特の画風を確立しました。特集コーナー展示「野見山暁治」では、石橋財団が所蔵している野見山暁治の作品全7点からその魅力に迫ります。近年新たに収蔵した3点は初公開となります。

左) 野見山暁治 《夕ヒチ》1974年、石橋財団アーティゾン美術館【新収蔵作品】
 右) 野見山暁治 《予感》2006年、石橋財団アーティゾン美術館【新収蔵作品】

アーティゾン美術館 〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2

Tel: 国内 050-5541-8600 海外 047-316-2772 (ハローダイヤル) www.artizon.museum

アクセス：JR 東京駅（八重洲中央口）、東京メトロ銀座線・京橋駅（6 番、7 番出口）、東京メトロ・銀座線/東西線/都営浅草線・日本橋駅（B1 出口）から徒歩 5 分

【広報用図版】

1 点のみ掲載の場合は 1 ページに掲載の図版《プリンセス達》1928 年をお使いください。

掲載時には必ずクレジットをご記載ください。また、文字載せやトリミングをご遠慮ください。

■図版は、下記サイトからダウンロードしていただけます。

広報用画像データのダウンロードはこちら

<https://www.artpr.jp/artizon/marielaurencin2023>



本プレスリリースについてのお問合せ先

アーティゾン美術館 広報課 松浦・小川・宮武

*一般の方のお問合せ先は 050-5541-8600 (ハローダイヤル) です。

E-mail: publicity@artizon.jp

TEL: 03-6263-0132 (広報課直通・誌面への掲載をご遠慮ください。)

〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2